

ABCCには、私の血はやらない 久保美津子さん(16歳の時に被爆)



「私の血を、私があげたくないと言っているのになぜいけないのです」。緊張で青くなっている顔を意識しながら、私は乾いた声で言った。すると、「アナタ、コトワルノ。ソナナコイッテイイノデスカ? グンポウカイギニマワシマスヨ」。

鼻にかかったカタコトノ日本語が、その人の口から吐かれた。明らかにアメリカ 2 世とわかるその人は、ふちなしの六角形のメガネをかけ、占領軍という虎の威を借りて、私の前に立ちふさがっている。

そこは 原子爆弾で足、や手、頭を焼かれて 2 年。やっと見つけた私の仕事場、小さな新聞社の事務室である。18 歳の私が必死で抗議をしているのに、そばにいる大人たちは黙りこくっている。

— 下手に口を出すと、自分も軍法会議に回されるかもしれない。

— 血を少しやれば、アメリカさんも気がスむことじゃないか。戦争に負けたんだから仕方がないよ。

彼らはそういう気持ちだったのだろう。

私はありったけの知恵を絞っ、この不条理な仕組みから逃れる術(すべ)を考えたが、「軍法会議」の 4 文字は大きくのしかかり、払いのける方策はなかった。

ある日、私は ABCC(原爆傷害調査委員会)から迎えに来るといいうジープをすっぽかして、一人悲壮な気持ちで、日赤病院の門をくぐった。当時昭和 22 年は、ABCC は日赤病院の 2 階にあった。原爆で焼けただれた階段を上って、氏名を告げると、待ち構えていた日本人の通訳が出てきて、私をアメリカ軍医の前に連れて行った。権力に負けた悔しさから、私は声を出して泣いていた。しかしそこでも精一杯の勇気を振るって通訳に言ってみた。

「私の血を私がやらないということがなぜ通らないのですか」。

彼は「日本は戦争に負けたんです。負けたんだから仕方がないですよ」。

通訳の言葉は私を納得させるというよりか、自分自身に言って聞かせているようであった。私はこの年配の通訳の言葉を聞きながら、「戦争に負けるということは、こんな小さな正義も通せなくなるということなんだ」と、胸いっぱいその理不尽さに対する悔しい思いを広げていった。

このような中で私のデータは取られた。あきらめと捨て鉢な気持ちでアメリカ軍の診察を受けると、私は外へ出た。照りつける昭和 22 年、1947 年の白い夏の陽の中で、私は屈辱と孤独をいやというほど味わっていた。

当時、焼け野原の広島には、働きたくても仕事はなかった。しかし診療所に働く母と、上半身を大やけどで死にかかっている弟と、3 人は生きていく道を見つけなければならなかった。八部通り倒壊している家を片づけ、屋根に瓦を並べるのも私の仕事だったし、田舎の親類を頼って、米やいもを買い出しに行くのも私だった。だから ABCC から二世が迎えに来るまでは、食べることに追われていた。しかしあの出来事があってからは私も被爆のことを真剣に考え始めた。

「いくら戦争に負けたからといって、自分のものを自分がやらないと主張することぐらいできてもいいんじゃないか。いや、なくてははいけない」「医学のために貢献するという事で考えても、私たちのデータが本当に平和のために使われるかどうか」など。

だから、曲がりなりにも 18 歳の私が「ABCC に血をやりたくない」と感覚的にとらえ、それを行動にあらわしたことは、理不尽なものに対しては反対をするという具体的な行動だったと今でも誇らしく思っている。

二年に一度、現在でも ABCC からは「お迎え」がくる。いっぺんだけ無理やりにとられたデータが ABCC のカードケースのなかで分類され、残っているからである。

あの時と変わっていることは、「お迎え」さんはインギンであり、純粋な日本人であるということだけだ。迎えが来るたびに、私は 17 年前の「二世のお迎えさん」のオハナシをして、ABCC に行くことを拒否することにしている。今の職場の人も「行ってきなさいよ。ちょっと血をやればいいんだから」と言ってくれる。

しかし、私は今では血液の 10 cc の問題ではないと思っている。原水爆禁止と日本の平和の問題、世界の平和とつながりにおいて、自分自身の日常の具体的な行動を考えねばならないと思っているからだ。

ABCC がどんなに設備をよくし、迎えに来る人がどんなに丁寧であったとしても、実際には被爆者はモルモットにされただけで、治療は一切されていない。それどころかアメリカはこのデータを次の戦争のための資料として利用しようとしていると聞く。

世界の平和とは逆の方向へのデータの利用がある限り、私は ABCC にはもう一滴の血もやってはならないと心に決め、あの屈辱の時をかみしめている。(1964 年第 1 集より)